様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３４７０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２００７５

研究課題名（和文）チベット仏教寺院補修作業のための基礎データ集成の作成と公開―現状記録と原型再現―

研究課題名（英文）The establishment of plans for renovating Tibetan Buddhist monasteries: Documenting the present situation and reconstructing the original

研究代表者
奥山　直司（Okuyama, Naoji）

高野山大学・文学部・教授

研究者番号：５０１７７１９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：国境線を越えてアジア各地に拡がるチベット文化圏においてその文化の中核を担う仏教寺院は、近年急速に衰退荒廃しつつあり、物理的修復が急務とされている。その修復は緩やかに推進されてはいるが、前提とすべき基礎データが欠如しているため適確な補修がなされず、かえって文化財を損なうケースが見受けられる。本課題は寺院修復作業に直接寄与しうる基礎データ集成の作成を目指す。シャル、サキャ、ペンコル、プンツォクリンを指標として、現地調査にて破損状況を確認し対策を立て、(1)寺院本来の姿・機能を再現すべく空間論を明かし、(2)建築・美術の独自性を明かすために印中文化交渉の影響を分析して総合的解明を試みた。

研究成果の概要（英文）：Particularly during the last two centuries, the decay of Buddhist monasteries in the Tibetan cultural sphere has quickly advanced, and their physical renovation is one of the present generation's urgent tasks. Renovations hitherto done have been based on insufficient knowledge and have not been effectively carried out. In some cases, the result has even been additional damage to buildings, including to mural paintings. The present study aims at presenting a basic plan and concrete ideas for such renovation on the basis of case studies dealing with four monasteries: Sakya, Zhalu, Pelkhor, and Jonang-Puntshogling. Based on field research at these monasteries, we have identified damaged parts of the monasteries and established concrete plans for their effective renovation. We have made a precise appraisal of the present situation and tried to reconstruct the original architecture and mural paintings of the monasteries through textual studies.

研究分野：チベット学

キーワード：チベット仏教寺院　文化財保護　現状記録と原型再現

１．研究開始当初の背景

チベットは、吐蕃王国最盛期にあたる 8 世紀から 9 世紀に空前の領土を誇り、北はシルクロード、南はネパールにまで国境線を拡大し、それらの諸地域においては、言語から習俗にいたるまでチベット文化の軛を刻み込んだ。やがて九世紀に王国が瓦解した後も、14 世紀頃までチベット語は公用語(lingua franca)として中央アジア諸地域で使用され続け、また一方でチベット氏族仏教教団が元朝を施主に迎え入れるなど、広大な範囲にその文化の痕跡を維持し続けた。このように文化的影響を蒙ったアジアの諸地域はチベット文化圏と呼ばれ、今なおその跡を色濃く留めている。

その発信源であるチベット本土(現中国チベット自治区)には、かつて芸術と技術の粋を尽くして作られた仏教寺院が、競って建立され、文化と政治の中心地として機能していた。歴史に名を残した大寺院は、一流の宗教建築という文化財としての価値を持つことはさることながら、そこに描かれた芸術的価値の高い仏教壁画もまた、美術史研究に際しても欠かすことできない貴重な資料となっている。しかしながら、度重なる教団間の勢力闘争を経験し、そして 20 世紀の文化大革命の被災により寺院をめぐる状況が激変し、その荒廃は著しく、管理も十分には行われていない。その結果、これら文化遺産は現在、危機的な状況におかれている。

そのような状況を打破するためには、綿密に練られた計画に基づいてさらなる劣化を予防し、補修を遂行することが喫緊の課題とされている。そして補修遂行に際してまず必要なことは、チベット文化圏に残された仏教寺院を総合的に調査し、現状を正確に記録したうえで、その歴史的展開を総合的に解明することによって、基礎データ資料を作成することである。事実、一部の廃退した寺院は、無計画な突貫工事によって、往時の美観をすっかり失ってしまった。また剥落した壁画の多くも、近年の修復においてはしばしば、本来の様式が無視されたり、部屋の使用用途とは無関係な壁画が描かれたりもしている。

本課題は、その現状を省みて、チベットの貴重な文化財としての仏教寺院の現況を保全し、正確な修復を可能にせしめるために、チベット仏教寺院における空間論の総合的解明しながら、基礎データ資料を作成することを目的とする。特に本課題では、寺院壁画および寺院建築の解明を軸とし、そしてその相互関係について空間論を明らかにする。

従来、寺院の壁を飾る壁画については、欧米の研究者を中心に一定の研究成果が上げられているが、その多くが美術史の見地からの様式研究であり、仏教文献、なかんずくチベット仏教寺院の壁画に大きな影響を与えている密教儀軌を始めとする文献との比較を通しての図像学的研究および、それらの壁画がいかなる意図の下にデザインされ、壁画が描かれる部屋の使用目的とどのように関わっているのかという、壁画と寺院の空間との関係はあまり論じられたことがない。またチベットの寺院建築についても建築以外の要素を含んだ総合的な視点から解明されてはこなかった。インドにおける宗教的空間を中心に扱う研究(森雅秀「仏教の空間論への視座」『論集』31, 2004 年など)や、日本密教寺院における建築空間論を扱う研究(藤井恵介『密教建築空間論』中央公論美術出版、1998 年)などがあるが、チベット仏教寺院を対象とした空間論の研究はいまだ存在しない。

２．研究の目的

かかる寺院の現状および不十分な研究状況を鑑みて本研究ではまず、ほぼ同じ時代(14～15 世紀)に建立され、文化大革命での破壊を逃れた諸寺院、特にシャル、サキャ、ペンコルチューデ、チョナンプンツォクリンの各寺院の本殿の建築的構造と壁画との関係を

明らかにすることによって、チベット仏教寺院において考慮された空間と壁画との関係の解明し、課題遂行にあたっての基点とする。上記四寺院の解明については下記の四点に焦点を定める。

A 四寺院における建築と壁画の現状を全体的に解明する。

B 四寺院における建築と壁画の、建立当初から現在に至る増築・補修などの経緯を明らかにする。

C 四寺院における各部屋の使用目的を明らかにして、その各空間に描かれた壁画の題材を比較検討することによって空間と壁画との関係を究明する。

上記四寺院は保存状態が良好で、建築・壁画において往時の風格を留めているため、破損状況がより深刻な他の寺院の修復を考える上でも検証の基準となる。また同四寺院の本殿には密教の曼荼羅を集めて壁画に描いたシェルイェーカン(無量宮)と呼ばれる部屋を有するなどの共通点が見られるため、壁画の破損などのせいで部分的に検証困難な箇所があっても、その共通点を活かした形でその不備を相互に補完でき、基礎データの精度を高めうる。

課題遂行の第二目的として、四寺院の調査成果を指標と定めてそれに立脚し、破損がより進行している他の寺院を視野に入れて、チベット文化圏全域に調査の範囲を拡げ、補修対象の幅を拡大する。その際、中央チベットのツァン地方、西チベットのガリ地方、ラダック、北のアムド地方の古刹に焦点を定め、適切なサンプルを選び抜いて上記 ABC の視座から総合的な解明を目指す。

課題遂行の第三目的は以上の成果の分析である。すなわちチベット寺院の建築・美術にみるインドおよび中国からの影響を各々解析し、インド・チベット・中国の間にみる文化交渉の歴史を総合的に分析し、それによって同時にチベットの寺院に特有な性質を明らかにする。

課題遂行の最終目的は、調査の結果を総合し、寺院の現状・修復課題・修復方法について分析したデータベースを作成し、文化財の適格な修復の遂行に貢献しうる資料を提示することである。

３．研究の方法

①課題遂行の基点として指標となる四寺院を実地調査し、②その成果に立脚してより劣化の進行する他の寺院(ネパール、中央･西･北チベット、ラダック)に調査範囲を拡げる。その際、実地調査により破損劣化箇所を記録し現状を正しく分析する一方、文献調査により建立当時の姿を探り、各部屋の建築・美術が有していた宗教空間における機能を空間論という軸から分析して寺院本来のもつ機能を再現し、史書翻訳集成、見取り図、壁画一覧、CG 立体再現資料を作成し、補修のためのデータ作成の手がかりとする。③データはさらなる補充調査によって不備を補い、統合・分析する。特に印中との文化交渉史の視点からチベット寺院特有の建築・美術上の特徴を明かし基礎データに活かす。④寺院調査・考察を総合して修復作業の基盤となりうる、具体的な補修課題と対策・方法をまとめたデータを報告書として公開する。

４．研究成果

上記の研究目的を達成するために下記 4 項目を遂行した。

①課題遂行の基点として四寺院(シャル、サキャ、ペンコルチューデ、チョナンプンツォクリン）を調査。

②これを指標として調査範囲を拡大(カトマンドゥおよびその近郊)。

③密教儀軌をはじめとする文献調査を応用した壁画の題材の比定と、これまでの調査の不備を補う補充調査。調査データを総合

的に分析してチベット・インド・中国の文化交渉史の視点からチベット寺院の特徴を明らかにした。
④寺院調査・考察を総合して修復作業の基盤となりうるデータ資料を 5 点にまとめた。

①課題遂行の基点として四寺院(シャル、サキャ、ペンコルチューデ、チョナンプンツォクリン)の調査。

1. 四寺院の建築・壁画の現状を確認するために実地調査を遂行した（2012 年 8 月）。(a)四寺院の壁画の写真撮影。(b)各部屋の大きさと壁画の大きさの測量。(c)寺院内の碑文(壁画の中の銘文)の収集と解読。(d)寺院建築における増築箇所の精査。(e)各寺院の住持へのインタビュー。(f)建築における劣化状況の適確な記録。
2. 四寺院の建築・壁画の建立当初から現在にいたる経緯を確認するために歴史文献の調査を行い、各壁画の題材・内容を分析するために密教儀軌との照合分析を行った。 (a)チベット語による歴史文献および紀行文の調査、(b)インドおよびチベット撰述密教儀軌文献 (壁画の題材と関連する密教儀軌) の調査。
3. データの整理。(a)上記 1，2 の調査をもとに四寺院それぞれにおける建築構造の見取り図を作成。(b)同じく壁画の内容の一覧表を作成。
4. 分析。(a)寺院の各部屋を、使用目的に応じて、(i)一般信者が参拝する空間と、(ii)僧侶が日常の僧院生活で使用する空間、(iii)特殊な密教儀礼において非日常的に使用する空間、という 3 種に分類し、それぞれの空間における建築の構造と壁画の題材とを検討することによって、空間と壁画との関係を究明した。(b)このように得られた空間論による分析結果から、寺院の原型を想定し、現状と比較してその差分から劣化の程度を導き出し、劣化の原因を特定した。

②上記の成果を指標として調査範囲の拡大(ネパール)

1. 当初予定していた北チベット(青海省ラプラン寺)、西チベット(タボ寺)、ラダック(スピトク)は果たし得なかった代わりに、ネパールにおいての寺院調査を遂行しえた（2015 年 1 月）。
2. ①と同じ手続きによってデータの整理と分析を行った。
3. 調査で得られた各寺院の現状のデータを、歴史文献資料から知られる同寺院について情報に照らし合わせ、劣化の具合を確認し、修復の可能性を打診した。

③上記の調査上の不備を補うべく補充実地調査を行い、蓄積した調査データを総合的に分析してチベット・インド・中国の文化交渉史の視点からチベット寺院の特徴を解明する。
・上記の調査を行った寺院の基礎データをまとめて、各寺院について増築部分や修復箇所を特定し、史書類と照合して再構成されうる寺院建立当初の原型をコンピューターグラフィック上に立体化して再現するための基礎資料を整えた。
・各寺院について、美術面(壁画題材と様式)と、建築面(壁、床、屋根、開口、階段、柱・皿斗・肘木・梁の構成、バルコニー、断面構成、寸法体系)とにおいて、各項目ごとに特徴をまとめ、そこにみられる中世インド・ネパールおよび中国の仏教寺院建築・美術からの影響をそれぞれ分析し、アジア仏教文化圏における建築・美術を介した文化交渉の視座から解明を試みた。
・以上の分析を通じチベット仏教美術・建築に特有な性質を明らかにし、その本質を明した。

④寺院調査・空間論分析の成果を総合し修復作業の基盤となりうるデータ資料を 5 点にまとめた。
すなわち、a. 関連チベット語文献資料和訳集成、b. 壁画画像データ集成、c. 塑像データ集成、d. 寺院建築見取り図、e. 破損箇所の一覧リスト、f. 修復案の一覧リスト(件の四寺院についての測量、見取り図および建築素材の分析、着工の具体策は菅澤が担当。サキャ寺の三解脱門堂の壁画曼荼羅および堂宇の沿革、碑文の分析による時代推定は加納が担当。シャル寺本殿無量宮の曼荼羅について川﨑が担当。14 世紀のチョムテンレルティによる仏像比率規程集の和訳と分析は田上が担当。シャル寺本殿一階回廊壁画の顔料選定や調達手段などについては正垣が担当。)
・a-d によって寺院の現状をとりまとめ、e-f によって具体的な文化財保護案を提示した。
・基礎データ資料は科研報告書として一般公開（印刷中）して本課題の成果を国内外に周知せしめ、修復を実行している中国国内外の団体(社会科学院等)と接触を図り、本課題に提示した案の遂行を模索する。

（文責　加納）

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 16 件）
①加納和雄・川崎一洋、「サキャ南寺・三解脱門堂の歴史と曼荼羅壁画について」、密教文化 224、2011 年、5-29（査読有）。

②川崎一洋、「チベットに伝承される『金剛頂タントラ』所説の曼荼羅の図像について―シャル寺の作例を中心に―」、智山学報 61、2012 年、15-34（査読無）

③川崎一洋、『理趣広経』所説の摂部曼荼羅について、善通寺教学振興会紀要 17、2012 年、15-30（査読無）

④川崎一洋、「プトゥンが伝承した『真実摂経』所説の曼荼羅 ―四大品の大曼荼羅を中心に―」、密教學會報 50、2012 年、252-219（査読無）

⑤加納和雄、「アティシャに由来するレティン寺旧蔵の梵文写本―1934 年のチベットにおける梵本調査を起点として―」、インド論理学研究 4、2012 年、123-161（査読無）

⑥加納和雄、「チョムデンリクレル著『大乗究竟論荘厳華』和訳および校訂テクスト（２）―『宝性論』I.4-22 の注解―」、高野山大学論叢 48、2013 年、1-14（査読無）

⑦加納和雄、川崎一洋、「リンチェンサンポ著『チャクラサンヴァラ・アビサマヤ注』―蔵文校訂テクスト―」、高野山大学論叢 49、1-36、2014 年（査読有）

⑧加納和雄、「サキャ南寺・三解脱門堂再訪―北壁面銘文を中心に―」、高野山大学論叢 50、2015 年、43–50（査読有）

⑨奥山直司、「チベット系仏伝図復元のための試論：「釈尊絵伝」を例として」、加納和雄（編）、科学研究費成果報告書、『チベット仏教寺院補修作業のための基礎データ集成の作成と公開―現状記録と原型再現―』、2015 年、印刷中（査読無）

⑩川崎一洋、「シャル寺無量宮の曼荼羅壁画について―『曼荼羅目録』の試訳―」、加納和雄（編）、科学研究費成果報告書、『チベット仏教寺院補修作業のための基礎データ集成の作成と公開―現状記録と原型再現―』、2015 年、印刷中（査読無）

⑪菅澤茂、「チベット寺院建築」、加納和雄（編）、科学研究費成果報告書、『チベット仏教寺院補修作業のための基礎データ集成の作成と公開―現状記録と原型再現―』、2015 年、印刷中（査読無）

⑫田上操、「中世チベットの造像度量法―チョムデンレルティ著『仏身規定荘厳華』―」、加納和雄（編）、科学研究費成果報告書、『チベット仏教寺院補修作業のための基礎データ集成の作成と公開―現状記録と原型再現―』、2015 年、印刷中（査読無）

⑬渡邊温子、「カトマンズ寺院調査報告」、加納和雄（編）、科学研究費成果報告書、『チベット仏教寺院補修作業のための基礎データ集成の作成と公開―現状記録と原型再現―』、2015 年、印刷中（査読無）

⑭正垣雅子、「シャル寺第一層回廊壁画―龍王樹下説法図の表現技法の考察―」、加納和雄（編）、科学研究費成果報告書、『チベット

仏教寺院補修作業のための基礎データ集成の作成と公開―現状記録と原型再現―』、2015 年、印刷中（査読無）

⑮加納和雄、「サキャ南寺大師堂のドムツンタンパ」、加納和雄（編）、科学研究費成果報告書、『チベット仏教寺院補修作業のための基礎データ集成の作成と公開―現状記録と原型再現―』、2015 年、印刷中（査読無）

⑯加納和雄、「サキャ南寺蔵の梵文写本覚え書き」、加納和雄（編）、科学研究費成果報告書、『チベット仏教寺院補修作業のための基礎データ集成の作成と公開―現状記録と原型再現―』、2015 年、印刷中（査読無）

〔学会発表〕（計 5 件）
①川崎一洋、「チベットに伝承される『金剛頂タントラ』所説の曼荼羅の図像について」、第５５回智山教学大会、真言宗智山派別院真福寺（東京）、2012 年 5 月 21 日。

②川崎一洋、「『理趣広経』に説かれる灌頂儀礼について」、密教研究会、高野山大学、2012 年 6 月 8 日。

③加納和雄、「カシュミールからチベットへ伝わった仏典梵文写本」、密教研究会、高野山大学、2013 年 7 月 13 日。

④奥山直司、「チベット仏伝図復元の試み―「釈尊絵伝」左 4 図を中心に―」、密教研究会、高野山大学、2014 年 7 月 11 日。

⑤加納和雄、「チベット語史料伝記類に言及されるチベット伝世梵文写本―ターラナータ、シトゥ、ゲンドンチュンペーを中心に―」、密教研究会、高野山大学、2014 年 7 月 11 日。

〔図書〕（計 2 件）
奥山直司（分担執筆）、『宗教の事典』2012 年、朝倉書店。

加納和雄（編）、科学研究費成果報告書、『チベット仏教寺院補修作業のための基礎データ集成の作成と公開―現状記録と原型再現―』、2015 年、印刷中。

〔その他〕
ホームページ等
https://koyasan-u.academia.edu/KazuoKano

６．研究組織
(1)研究代表者 奥山直司（OKUYAMA, Naoji）
高野山大学・文学部・准教授
研究者番号：50177193

(2)研究分担者
加納和雄（KANO, Kazuo）
高野山大学・文学部・准教授
研究者番号：00509523

川崎一洋(KAWASAKI, Kazuhiro)
高野山大学・文学部・非常勤講師
研究者番号： 50421293

(4)研究協力者
菅澤茂(SUGASAWA, Shigeru)
田上操(TAGAMI, Misao)
正垣雅子(SHOGAKI, Masako)
渡邊温子(WATANABE, Atsuko)